

特攻を見送る写真に関する考察

坂元 恒太

はじめに

昭和二十(一九四五)年四月十二日に、知覧飛行場で撮影された一枚の写真がある(図1。以下、この写真)。これから出撃しようとする陸軍特別攻撃隊員を知覧高等女学校(以下、知覧高女)生徒らが、桜の枝を手に見送る場面である。この写真は、戦後から現在に至るまで、特攻の史実を紹介する際にしばしば用いられている。例えば、村永薫編『知覧特別攻撃隊』^(注1)、南日本新聞社編『特攻この地より かごしま出撃の記録』^(注2)や、中学校社会科教科書『新しい日本の歴史』等に掲載がある^(注3)。

知覧特攻平和会館では、従来よりこの写真を館内で展示し、知覧における特攻の史実を象徴するものとして取り扱ってきた。そして平成三十一(二〇一九)年四月、リニューアルした戦史資料室のメインコーナーとして、写真が撮影された日に書かれた女学生の日記と、日記記述者の証言映像とを併せて、この写真を紹介する展示を新設した。

当館では、以前からこの写真は毎日新聞社が撮影したもので現在でも画像データの使用に関するサービスを提供していることは認識していた^(注4)。筆者らは、戦史資料室のリニューアルを準備する中で、あらためて初出文献及び写真原本の所在を確認する必要性を感じていた。そこで、国立国会図書館のデータバンクにて調査をした結果、毎日新聞大阪本社の昭和二十(一九四五)年四月十七日付



図1 特攻を見送る写真(毎日新聞社撮影・所蔵)

け朝刊に掲載されたものが初出であることを確認した。そして、原本の所在について毎日新聞社に問い合わせたところ、大阪本社に保管されていることを確認した^(注5)。

先述したように、当館では知覧高女の一人、故永崎(旧姓前田)笙子さんが記した当時の日記^(注6)、彼女の証言映像を有している。このように、写真・日記・証言と三つの記録から一つの場面にアプローチできる事例は他に知らない。戦争体験者が今後ますます少なくなっていく中で、特に写真が語る情報の重要性は高まりつつある。